

## 論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名 中島朋子

中島朋子氏の論文審査は平成20年6月25日午後4時から6時まで、総合文化研究科18号館コラボレーションルーム2で行われた。審査委員はホーンズ・シーラ地域文化研究専攻教授、遠藤泰生地域文化研究専攻教授、菅原克也超域文化研究専攻教授、佐藤道信東京藝術大学教授、矢口祐人地域文化研究専攻准教授によって構成された。主査はホーンズが担当した。

本論文はアメリカにおける日本美術の定義に焦点をあて、さらに日本美術がいかに消費、研究されてきたかを論じたものである。日本美術史、アメリカ美術史、アメリカ消費文化論など多様な分野の先行研究をふまえて、アメリカにおける日本美術論の形成について分析をしている。「日本美術」という概念はときには日米それぞれで別箇に論じられながらも、過去一世紀の複雑な相互関係のなかで生み出されてきたものでもある。

本論文はアメリカにおける日本美術論を時系列的に三つのセクションに分けて論じている。第一セクションは、19世紀にアメリカで刊行された旅行記、地理本、(わずかな)専門書などをもとに、アメリカ人が日本美術をいかに発見し、概念化していったかを分析する。第二セクションはアメリカにおいて日本産の高級品が人気を博した19世紀末から、日本美術が安価な大衆品となっていく20世紀前半までを論じる。第三セクションでは日本において日本美術がいかに定義され、さらにその定義に基づいた日本美術品がアメリカに輸出されていった過程が説明されている。当時、アメリカでは「知の領域」が私的空間から公的空間、あるいはミュージアムのような大衆向けの「娯楽」施設から大学などの研究機関へ移りつつあった。アメリカにおける「知の生産」が変容するなかで、太平洋の両岸で日本美術を巡る言説が生み出されていった様子を分析している。

このように本論文は日本美術の概念とその定義を歴史学や文化地理学の視座から考察することで、その多様性と複雑性を明らかにしたものである。それにより、過去一世紀にわたりさまざまに変化をしてきた、アメリカにおける日本美術の意味を理解するものである。また本論文の意義は歴史分析にとどまらず、今日のアメリカにおける日本美術理解の手がかりをも提供している。たとえばこの研究は近年「日本美術」としてアニメや漫画がアメリカで注目されることについての歴史的な脈を与え、アメリカにおける今後の日本美術論の展望をも示唆している。

本論文の意義は多岐にわたるが、なかでも日英両方の言語の資料を駆使し、日米の美術論をきわめて学際的に考察した点を審査委員会は高く評価した。また一世紀以上にわたる日本美術をめぐる複雑な受容史・学術史について、わかりやすく、きわめて説得力のある分析が行われていることも評価された。さらに論文の後半で展開される、アメリカにおける戦間期の日本美術論はきわめて斬新な情報と分析であり、戦後の日米間で起こった美術

論を理解するための重要な歴史的知見を提供するものである。英文で執筆されたこの論文は、日本国内で日本語によって刊行されている日本美術に関する優れた研究成果を、欧米の研究者に広く紹介する役割を担うことにもなるであろう。

むろん、本論文にもいくつかの問題点がないわけではない。論文の叙述は非常に読みやすく仕上がっているが、逆にそのために論旨がやや平板になっている部分がみられることが指摘された。また、本論文は日英の資料を非常によく使っているものの、欲を言えば日本国内の日本語資料をさらに用いる余地もあったと思われる。さらに 1930 年代から 40 年代のアメリカにおける日米美術論の紹介と分析はきわめて意義深いものであるものの、当時の日米間の外交的な緊張関係についてより注意を払うべきではないかという指摘もあった。論文の英文はわかりやすく、読みやすく書かれているが、いくつかの表現などに関してはさらに推敲すべき個所があることも指摘された。

ただし、これらの問題点はすべて本論文の優れた意義から派生して生じていることであり、審査委員一同はこの論文の学術性、学際性、独創性などを高く評価した。

したがって、本審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。

## 最終試験の結果の要旨

論文提出者氏名 中島朋子

本審査委員会は平成 20 年 6 月 25 日に論文提出者に対し、学位請求論文の内容及び専攻分野に関する学識について口頭による試験をおこなった。

その結果、論文提出者は博士（学術）の学位を受けるにふさわしい十分な学識を有するものと認め、審査委員会全員により合格と判定した。

